

らびすらずり通信

令和7年夏号

やっぱりビッグスワンはデカかった

今年度初の行事は、ビッグスワンスタジアム社会見学でした。車を降り最初に目についたのは、スタジアムの大きさだった。遠くから見た時とは違い、想像以上に大きく僕の脳裏にやきついた。見学ツアーはスタッフの村田さんのスタジアム解説を聞きながら、場内を回った。皇室の方がサッカーを観戦する場所や監督、コーチの部屋、ドーピング検査室など様々な部屋があった。印象に残ったのはピッチへ行った時です。ピッチに入る時は選手の方と同じ場所から入りそこを抜けると目の前には、フィールドが広がっていたんです。

上を見上げれば、空に広がる観客席がありその下にはサッカーなどを行う天然芝のピッチがあった。村田さんの話で印象に残ったのは、フィールドへは風が入らないため、芝に水を撒きその後根が腐るのを避けるため扇風機の風をあて乾かすことです。スポーツ観戦だけでは知る事のない裏方の皆さんの働きを知りました。スタジアムの普段見られない裏側や貴重な話を聞き、好奇心を刺激する有意義な時間を過ごせて大変良かったです。(w・k)

世界へはばたけ！ らびすらずりのあずま袋

地域活動支援センターらびすらずりでは、頂いた着物などからあずま袋を手作りしています。一つひとつ違った魅力のある自慢の一品です。

私達が作ったあずま袋は、都内を中心にレンタルスペースや宿泊施設にも置かれています。これは設立時より入力業務などの委託を受けている不動産会社様のご協力によるものです。インバウンド需要も復活し、訪日観光客は激増中。らびすらずりでは、施設を利用された海外の方があずま袋を手にとってもらいやすいよう、英語等のメッセージカードを付けて、あずま袋がどのようなものかを分かりやすく伝えています。これ、嬉しい事に好評なのです。帰国され持ち帰られたあずま袋を気に入っていただけたなら、世界中にあずま袋の良さが伝わり、らびすらずりの名前も広まる事でしょう。いつか、らびすらずりのあずま袋が、あの太谷翔平さんにも届くと良いですね！(A.I)



愛恵福祉支援団へ頂いた愛を、他の人へもおすそ分け

毎年、酷暑が続く夏。これは日本だけの問題ではなく世界的にも同様の現象だ。昨年の夏の事である。突然の災難が降ってきた。毎年ブンブン働いてくれたエアコンがまさかの、故障！業者さんからも診てもらったが、更に高額な修理費用となるため泣く泣く諦めました。「まだ夏は続くのにこれからどうしよう」と一時はへたりこみ、途方に暮れていた私達に、愛恵福祉支援財団様より、エアコンの寄贈を頂きました。暑さをしのげる事は言うまでもありませんが、環境が整うことで活動の効率が上がる事を今更ながら実感しました。愛恵福祉支援財団様、心より御礼申し上げます。(く)

ありがとう
ございました



6月13日 金曜日 ホワイトカレーとスイーツはフルーツケーキワンホールです	6月12日 木曜日 ホットドッグと新潟の味ポッポ焼き	6月11日 水曜日 韓屋さんのキムチだれを使った豚キムチスイーツは最中です	6月10日 火曜日 今日はらびすらずりの誕生日 タコライスとホールケーキを作ったよ	6月9日 月曜日 お昼はクリームシチュー スイーツはホットケーキとパチパチチョコ
--	-------------------------------	--	---	--

誕生日ケーキ

手づくり最中



タコスライス



パチパチチョコ



フルーツケーキ



ホットドッグ



ポッポ焼き

結成 18 年 劇団blueジーンズ 里村さんにちょっとお聞きしました

らびすらずり通信インタビュー第2弾！！は、劇団 blue ジーンズで演出を担当している里村英子さんです。勿論、毎年上演する芝居にも女優として出演し、パワフルな演技で僕達を圧倒させてくれます。らびすらずりでは定期公演で毎年受付をさせていただいています。そんなご縁があり、今回のインタビューとなりました。インタビュアーは統括部門の安宅です。

安宅:こんにちは、今日は宜しくお願いします。最初にお邪魔している場所が、女のスペースにいがたんですが、里村さんと女のスペースにいがたとの関わりを教えてください。

里村:私は劇団 blue ジーンズの活動をしながら、女のスペースにいがたでも活動をしています。女のスペースにいがたは今年で設立 30 年です。これまで女性達のあらゆる相談に寄り添ってきました。そして、これからも更に充実した支援をしていきます

安宅:30年も前から女性の支援をしているんですね。具体的にどんな活動なのか、簡単に教えてください。

里村:安宅さんも聞いた事があると思うんだけど、パートナーからの暴力、DV 相談や離婚、親子関係、子育て、女性の置かれている経済的な相談もあります。女性が直面している様々な問題が日本にはたくさんあります。

安宅:そんな里村さんが芝居と出会ったきっかけは、どんな事があったのですか。

里村:10代後半から芝居に関わって来たけれど、その原点は1960年から1970年頃に唐十郎が旗揚げした紅テントっていう状況劇場かな。その芝居のスタイルっていうのが水があったり、火があったりハチャメチャで凄い迫力なのよ。その芝居の場所が公園に自分達でテントを建てて演るの。カッコよくってね。新潟にも3回くらい呼んだのよ。当時私は芝居を演るつもりじゃなくて、何か手伝いたい気持ちで関わっていたのよ。それが段々と演じるほうになったんだね。

安宅:若い頃から、芝居に魅了されていたんですね。

里村:結婚をして子どもを産んでからは、長い事芝居から遠ざかっていました。で、50代頃に芝居を再開し、仲間たちと blue ジーンズを始めたんです。Blue ジーンズは今年で結成18年なんですよ。

安宅:僕達は芝居当日の受けをしてから芝居を観ているけど、重いテーマだったりするんだけど、すごく皆さん楽しそう。

里村:安宅さん、私ね、20代の頃は混沌とした時間を過ごしていたんだよ。何をしたいのかさっぱり分からなくて、何をしても続かなかった頃だった。あの頃は面白い事が一つもなくて、宙ぶらりんだったんだよ。

安宅:えー里村さんにそんな時代があったんですか。今からは、想像がつかないな。

里村:そんな頃に知り合いが東京で芝居をやるから観に来ないって誘ってくれてね。行ったら、当時の鏡張りのディスコで芝居やっていたのよ。「ハー、こんな表現もあるんだ」ってビックリしたの。当時はとにかく手探りで何かを探していた頃だったから、その衝撃に「これだー」って思ったんだね。

安宅:そんな時代を経た時間が、今の里村さんの舞台に繋がっているんだと思うと不思議な気持ちになります。

里村さん、また今年の舞台も楽しみにしています。僕達も受けを、頑張りますよ



インタビューのスペシャル版はホームページで らびすらずり 新潟

♪ 君とデニムの青が
褪せて行くほど
味わい増すように
by Mariya Takenuchi ♪



らびすらずりでは社会体験活動があります。その多角的な活動の中では、様々な方々と出会いがあります。広報班の中で「いつか、あの人の話を聞きたいね」と何人かのリストがあり、その中のおひとりが劇団 blue ジーンズの里村さんでした。今回、インタビューを申し込んで、里村さんから指定された場所が女のスペースにいがたでした。緊張の面持ちでお邪魔した私達を迎えた部屋の壁には、上記の写真にある通り憲法第14条の条文が力強い筆致で掲げられて、圧倒させられました。＼(◎o◎)／そんな私達を、満面の笑顔で里村さんは迎え、緊張を解してくれました。劇団 blue ジーンズが17年の間に創られた芝居は、常に社会問題、戦争、平和、生きる女性の姿等私達に問いかける内容が多いと感じていました。それが、今回通された部屋を見て「そうだったのか」と納得。芝居の柱にはその思いを据え、コミカルに笑わせ、時に血がたぎるような熱量で観るもの達を感動させてくれます。インタビューを通じて、そんな里村さんの今の姿からは「混沌としていた」とは想像が付きませんが、それはやはり青春の1ページ、自分の居場所を必死に探していた頃もあり、年月は同じ場所に留まらない川の流れのようなんだと思うのです。今回同行した若者2人も、きっと共感しているのではないのでしょうか(*^-^*)。私はたとえば、唐十郎・紅テント・状況劇場の単語のなんと、なんと懐かしい。本物の舞台を観た事はありませんが、その数々の伝説は耳にした事があります。「柱1本、釘1本から演者、裏方関係なく皆でテントを設営して、そこで芝居するの。そして芝居が終わったらまた元に戻す。そんな非日常って大変だけどカッコいいよね」と笑う里村さん。「もっとあがいて、もがいて、でんぐり返っていいんだなあ」と、妙な納得をしました。これからも、そして今年の舞台で会える里村さんをはじめ劇団 blue ジーンズの芝居が楽しみです。(久)

編集後記

日々の業務はきちんとおこない「でも、人生楽しまなくちゃ」と毎月の掲示しているカレンダーには、その月らしい活動を入れてます。もちろん、計画立案は企画調整係が担ってくれます。ビッグスワン見学や周年祭以外にも、小さな体験企画はちょい、ちょいあります。「こんな事やって、一体何になるんだ」と不思議に思っている人には、「一緒にまず身体を動かしてみないかい」と声を掛けたいです。(久)

地域活動支援センターⅢ型 らびすらずりは 新潟市地域活動センター事業の補助金を受けて運営しております。